

第V章 出土遺物の検討

1. 子持勾玉について

はじめに

鳥取県の子持勾玉の出土数は、現在18個を数える。全国では327個にのぼり、その後の発見もあり現状ではさらに増加をしているが、島根県では5例、岡山県、広島県、山口県で数例しか確認されておらず、西日本でも有数の出土地域といえる。^(註1)

内容的にも、線刻例の東部偏在、大阪カトンボ山例に類似する二連結の高辻例、出雲地方的な福市例、同心円紋装飾例など、興味深い特徴を示しているように思える。

しかし、単独・偶然に発見される場合が多く、出土状況の分かるものはごくわずかで、古墳時代中期に始まる祭祀遺物としか分かっていない。

今回の研石山遺跡の子持勾玉は、調査中に遺構に伴って発見された例としては、鳥取県では米子市福市遺跡（23号住居跡）^(註2)に続き2番目である。しかも、同じ米子市内の近接地であり、住居跡出土という共通性ももっている。

最近の研究成果をもとに、鳥取県出土の他の子持勾玉も含めて検討をしてみたい。

研究史

子持勾玉は江戸時代から注目され、刀剣の柄頭と考えられ、石頭剣と呼ばれていた。子持勾玉と呼ぶようになったのは、明治30年代の初めである。起源・用途については、魚型起源説、銅鐸起源説、祭祀遺物説、靈力増殖説などがあげられ、型式分類・年代について多くの諸氏^(註3)によりさまざまな諸説があげられている。

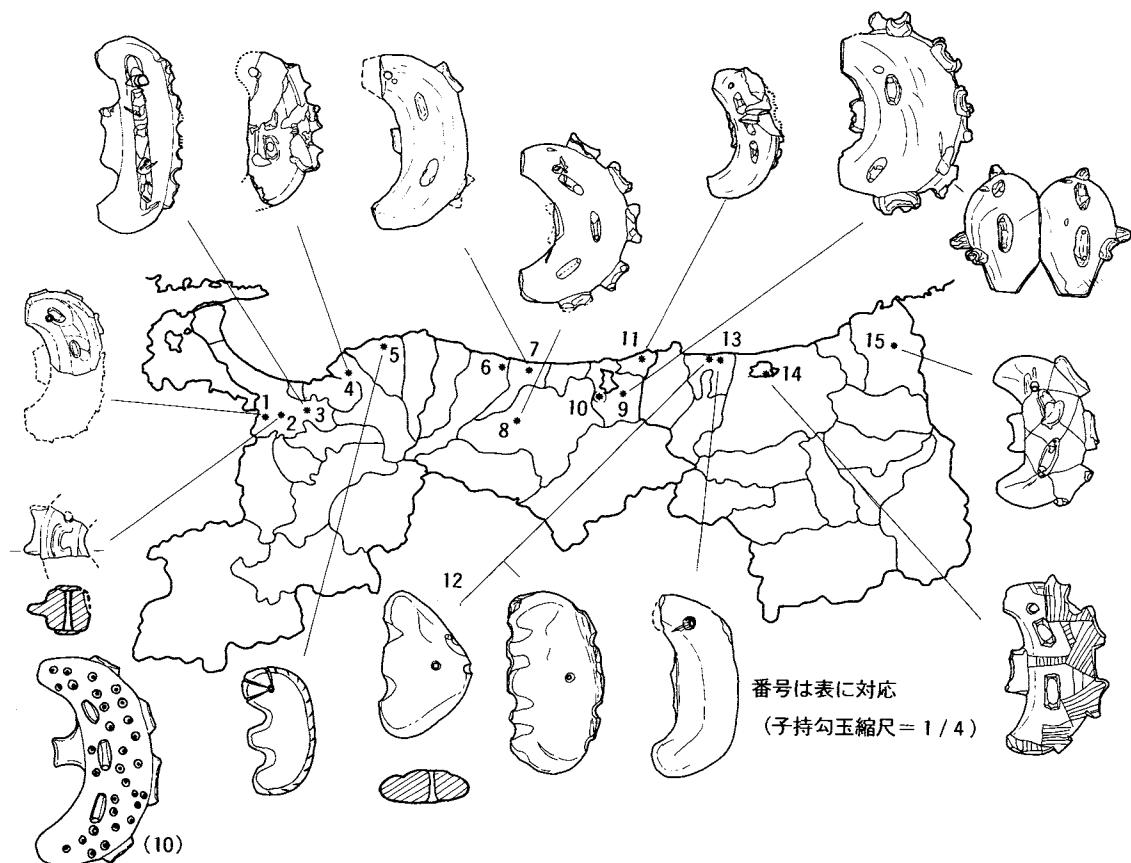
全国的にみても子持勾玉は、古墳や祭祀遺跡からの出土がかなり多く見られる。山陰地方の出土をみると、鳥取市青島の祭祀遺跡や松江市二名留古墳石棺・金崎1号墳石室などから出土しており、祭祀的遺物であることは間違いないところだろう。^(註4)

山陰地方では近藤正氏の研究があり、山陰地方出土の子持勾玉を本体の断面と突起の形態および数を基準として4型式に分類され、この型式の違いが地域の違い（製作地の違い）につながるであろうことを考察されている。^(註5)

鳥取県では、亀井熙人氏が青島遺跡出土のものについて資料紹介をされたをはじめ、清水真一氏が福市遺跡出土子持勾玉の紹介や県内出土の子持勾玉の集成をされている。^(註6)

最近の研究

1989年神戸市教育委員会の大平茂氏が、伴出遺物から年代決定の可能な子持勾玉について検討し、後背部の突起（子勾玉）のあり方や製作技法の違いに重点をおいて形式分類をされた。本体（親勾玉）断面の比率をY軸、本体反りの比率をX軸としてグラフ化し、年代と比率との規則性を見いだされた。その結果、断面が円形に近くなるほど古く、楕円形、そして断面長方形に変遷し、また、本体断面の比率が同じであっても本体反りの比率が大きくなれば古く考えられるとされている。分類は、背部の突起が独立しているもの（A型）と、背部の突起が連続



挿図210 鳥取県内子持勾玉出土分布図

挿表5 子持勾玉出土一覧表

番号	遺跡 遺構名	所 在 地	出土数	時代推定	分類	備 考 (近藤氏分類)
鳥 取 県						
1	新山研石山	米子市新山字研石山	1	6 C 前	A-1	住居跡出土 (2型式)
2	福市吉塚23号住居跡	米子市福市字吉塚	1	5 C 中～後	B-1	(3型式)
3	日下	米子市日下	1	5 C 後	B-2	(2型式)
4	平	西伯郡大山町平字大谷尻	1		(A)	「長田出土」と同一品 (2型式)
5	御来屋	西伯郡名和町御来屋	1		B-2	(2型式)
6	宮前田	東伯郡東伯町櫟下字宮前田	1			(2型式)
7	大栄町	東伯郡大栄町	1	5 C 後	A-1	(型式)
8	福積	倉吉市福積	1		A-1	(1型式)
9	高辻	東伯郡東郷町高辻字清水屋敷	1	5 C 中	A-1	2個連結式 (1型式)
10	東郷町	東伯郡東郷町	1		A-2	倉吉～松崎間路上 (2型式)
11	石脇	東伯郡泊村石脇字堀	1	5 C 中～後	A-2	(2型式)
12	浜村	気高郡気高町浜村	2		B-1	(4型式)
13	日光坂	気高郡気高町矢口字日光坂	1		(B)	(4型式)
14	青島	鳥取市高住字青島	3	6 C 前	A-1	他に有孔石製板 (2型式)
15	真名	岩美郡岩美町真名	1	5 C 後	A-2	川床出土 (2型式)
島 根 県						
1	二名留2号墳	松江市乃木福富町	1	5 C 後	A-1	主体部墓壙検出面出土 (2型式)
2	金崎1号墳	松江市西川津町	2	5 C 中～後	A-1	堅穴式石室内出土 (3型式)
3	出雲玉作跡	八束郡玉湯町	1	5 C 中～後	A-1	住居跡出土 (3型式)
4	岩屋口遺跡	安来市佐久保町	1			住居跡出土 (型式)

しているもの（B型）の2種類に分類されている。

この論稿で、子持勾玉の研究に一応の結論が出ているように思われる。^(註7)

鳥取県内の子持勾玉の分類と編年

大平氏の研究を鳥取県内の子持勾玉にあてはめ、分類と年代推定を試みてみた（表5）。

形態的にみるとA類の分布が多数を占め、県内の広い範囲に分布が見られるのがわかる。B類は少数ではあるが西部に3例と比較的多く分布が見られ、中・東部では浜村出土のものだけである。

年代推定では、比較的古いものがよく見られるのが特徴的である。最も古いものでは高辻遺跡出土のものが5世紀中葉に推定でき、そして多くのものがほぼ5世紀後～6世紀中葉にかたまっている。

新山出土の子持勾玉

研石山遺跡の子持勾玉は、古式須恵器の時期と思われるS I 15の壁際より出土した。縦に割れ、さらに真中に二つに折れ、頭部側半分が残る。断面の様子から故意に破碎されたと思われる。

大きさは残存長さ5cm、断面2.8cm×1.7cmを計り、胴部断面は楕円形を呈する。頭端はカットして平坦面を持ち、穿孔は1箇所で径3mmを計る。

小勾玉はそれが独立して削り出され、長さ1.1mm×高さ2～3mm×幅5mm程度の大きさである。現存では胴体の背部に3個、側面に2個の小勾玉を有し、復元すると背部に6～7個、側面に片側4個の小勾玉を有すると思われる。小勾玉が小振りであること、頭端近くまで存在すること、また、（あくまで復元推定ではあるが）数の多いのが特徴といえる。腹部の鰐状突起の有無・形状は現状では判断しかねる。

石材は火山灰の混じった堆積岩で蛇紋岩系ではないかと思われる。色調は深緑色である。大平氏の分類によると、A-1類にあたり、本体断面の比率0.61、本体反りの比率（推定）0.51で、III型式に属すと思われ、6世紀前葉のものと推定できる。これは、調査での住居跡の年代観にも近い。（但し、計測値は微妙であり、一つの目安として考えたい）。

研石山遺跡では、子持勾玉以外に石製の有孔円板や紡錘車が、それぞれS I 12・S I 16に関連して出土している。祭祀的な石製模造品を意図的に分けて持っている事もうかがえ、この時期における祭祀の一端を示しているようである。

遺跡での古式須恵器の多さや、移動式竈の存在も含めて、集落やその中で行われていた祭祀の性格や内容を考える上で、一つの方向を示すものと思われる。

本稿をまとめるにあたり、下記の方々の御協力・御教示を頂いた。記して謝意を表す。

中山勝博（島根大学理学部－石材）、蒲原宏行（佐賀県立博物館）、久保穂二郎（鳥取県立博物館）、清水真一（桜井市教育委員会）、佐藤雄史（小郡市教育委員会）

なお、掲載した子持勾玉の実測図の原図は亀井熙人、中野知照、森田純一各氏によるものである。

註1 形態分類各説抄（大平 茂「子持勾玉年代考」『古文化談叢』第21集 1989による）

- 森 浩一 「子持勾玉の研究」『古代学研究』(1949) 大阪府堺市カトンボ山古墳出土の子持勾玉をもとに5型式の分類を試みた。断面の形態と厚み及び各部位における突起の有無とその数によって区分する方法をとる。
- 大場磐雄 『神道考古学論叢』(1943) 「本品の特異な点は勾玉形の本体と腹と背と胴とに突起物（子）が附着しているとある。これが何を意味するかは別として、その形状や数が問題となろう。」と検討を加え4型式5形態に分類した。
- 佐田 茂 「九州の祭祀遺跡」『九州考古学の諸問題』(1975) 突起物の作り方を基本にして4型式に分類した。製作技法から分類を試みたこと、そして、出現初期の頃からまるみをもった型式と作りの雑な型式が併存することを指摘した。
- 佐野大和 「子持勾玉」『神道考古学講座』3 (1981) 勾玉本体の断面形態と形状から3つに分類を行っている。しかし、各類の具体的な年代についてはあまり多くは記述されていない。
- 佐々木幹雄 「三輪山及びその周辺出土の子持勾玉」『古代』第71号 1982 等 製作技法を重視し、特に突起（子勾玉）の作り方を基準に大別し、3型式に分類している。また後年になって、親勾玉（本体）を基本に添え、3型式に分類し、さらに子勾玉（突起）も作り方によって6型式分類、この組み合わせによって型式を設定した。そして、伴出遺物から子持勾玉の年代の推定を試みられたことは、今後の研究にいかされることになる。

註2 近藤 正氏の研究

山陰地方出土の子持勾玉を本体の断面と突起の形態および数を基準として分類され、その分類結果からこの型式の違いが地域の違い（製作地の違い）につながるであろうことを考察として付け加えられ、以下の4型式に分類された。

1型式 全体が太く断面に丸みをもち、背部および側面の突起数が多くしかもその形態が同一である。

倉吉市福積、東伯町清水屋敷の2例がある。この型式は倉吉とその周辺にのみ分布している。

2型式 全体にやや偏平、両端がとがりあるいは丸みをもち、背部と側面の突起も勾玉としての形が失われる一方では腹部の突起が大形化する。またこの型式には、4例ほど側面に線刻ないし円形文を入れたものがある。岩美町真名、東郷町松崎付近、東伯町宮前、大山町平などがこの例で、ほかに、鳥取市青島、米子市日下、名和町御来屋があてはまる。そしてこの型式の分布は、最も広く鳥取県の東西に及んでいる。

3型式 全体がやや細く偏平、胴部断面は長方形に近い。背部と側面の小型の勾玉もより具象的でその表現も他の型式とは異なっている。米子市福市遺跡の吉塚23号住居跡出土、玉湯町出雲玉造跡出土、松江市金崎1号墳出土がある。その分布は鳥取県の西端から島根県東部に集中している。

4型式 いずれも背部などに突起が1個あるいはまったくない簡略化された型式で、あるいは未成品とも考えられるものである。氣高町浜村、同日光坂出土がある。きわめて限られた分布範囲をもつ。

註3 大平氏の分類

A型 背部の突起が独立しているもの。勾玉本体の断面形は、基本的に円形・橢円形・偏平と変化し、また背部の突起は、鰐を思わせる発達したものから徐々に退化していく。

B型 背部の突起が連続しているもの。勾玉本体の断面形は、A型同様に円形・橢円形・偏平と変化していくが、橢円形の次に、6世紀代から板状の断面長方形になり偏平な形へと移行していく。背部の突起は、基本的に波長の長い波形から短い山形になり、配置も背部の限られた範囲となってくる。

1類 本体の頭尾両端を平面的に削り落としたもの。

2類 逆に両端が鋭角化したもの

参考文献

- 大平 茂 「子持勾玉年代考」『古文化談叢』第21集 1989
『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985
亀井熙人 「資料紹介・青島出土子持勾玉」『郷土と科学』
近藤 正 「山陰」『神道考古学講座』第2巻 1972
原田雅弘 「泊村出土の子持勾玉」『鳥取埋文ニュース』NO.23
清水真一 「子持勾玉」『えとのす』 1982
『二名留古墳群発掘調査報告書』 松江市教育委員会 1992
『福市遺跡』 福市遺跡調査団・米子市教育委員会 1968